

## 文化八年（一八一二）における亀田鵬斎越後路の動向

岡村 浩・程 建敏\*・佐藤 嘉男\*\*

## 序

執筆代表者・岡村は江戸後期の儒家・亀田鵬斎（一七五二～一八二六）の越佐来遊の動向に着目し、その分析によって中央と地方文苑の豊饒な接触の有様を探求することを心懸けてきた。

鵬斎の県下に留める足跡は広域に及ぶが、遺墨と遺跡保存を旨とする顕彰活動を各地の方々と共同調査し、研究成果の発表を重ねている。各地で鵬斎の受け皿となった人々は、土地の重立・顔役を務めた文人で、それらの業績発掘と紹介も併せて行うことは、近世越佐文苑の点描につながる。

かつて岡村は「新潟大学教育人間科学部紀要」（第3巻第1号 H12・10刊）に「亀田鵬斎考―諸芸をよくした文人―」を寄稿し、文化六年（一八〇九）から八年に入るまでの動向を、取材で得た遺墨及び諸資料によって綴った。本編は、当時予告していたその続編を執筆するもので、資料の整理分析、遺墨の鑿字に際し、程建敏・佐藤嘉男両氏の協力を仰いだ。

## 亀田鵬斎

江戸後期を代表する文人の一人。上州にルーツをもつ。漢詩人・儒学者。松平定信の出した寛政異学の禁の政策に触れ、家塾をたたむ。文化六年（一八〇九）から三年余り、越後佐渡を巡遊、佐渡の矢島主計・出雲崎の内藤方廬等、頼りとする弟子が越人にいた。

「鵬斎は越後かえりて字がくねり」と江戸の戯句があるように、良寛との出会いをはじめ、数多くの逸話が伝わる。独特の書をよくし、くずし字が江戸でもはやされた。これは、大らかで豪気ある人柄と痛飲を好む面とに起因し、酔書の中から自然に内面を吐露した飄々たる草書体が帰国後に完成したと思われる。

一方、越後路に伝わる六十歳直前の作の多くは、直線を主体とする打ち込みや止めに力強いアクセントを表す楷書体である。読み易さが求められる碑文の揮毫にも名品をたくさん残しているが、縦横配字を揃え、活字の如き書風である。この楷書と先の草書を比べると、とても同一人物の作とは映らない。そこが鵬斎の書美の魅力であり、裏側に潜む彼の学芸への精進と幾つかの人生の転換期があったことを思わずにはいられない。

本名は長興。署名に「鵬斎興」とあるのは名を略記したもの。あざなは釋龍、通称文左衛門。鵬斎の他、金杉酔学生、墨江老漁（墨田川近く下谷の金杉に住んだことによる）、太平酔民、斗酒学士等酒にまつわるものを含め多くの別号を用いた。初め学問を井上金峨に、書は三井親和に学ぶ。宝暦二年（一七五三）生。文政九年（一八二六）三月九日、金杉の自宅にて七十四歳で遠行。浅草今戸の称福寺に葬る。

文化八年の動向を綴る前に、文化七年（一八一〇）記述を少し補ってお

二〇二二・六・二八 受理

\* 新潟大学現代社会文化研究科博士後期課程在籍

\*\* 新潟大学教育プログラム支援センター科目等履修生

く。この年十月新津の素封家・桂家のところへ身を寄せ、また同地の諸橋氏のために「後赤壁賦」を書く。十二月加茂にて山水画を描く。

以上の足跡を裏付ける遺墨として『亀田鵬斎総集』(H19刊・注1)に収めた作品を通覧してみると、『総集』159番作、桂氏宛書簡 160「幽叢館」扁額 161「龍谿」 162「鶴舫」 163「新津桂氏所藏元絹観全墨画山水図屏風極」 164諸橋氏への為書 165胸中山風水墨山水図二曲半及屏風 166「萬巻樓記」(注2)を載せる。163作には「冬十二月朔日」と款記にある。このように文化七年歳末では、下越地方の名家旧族との関わりが連なっている。その後、燕の神保氏に移り越年、元旦を迎える。

### 文化八年(一八一二) 干支・辛未 鵬斎六十歳

#### 〈元旦・燕・神保氏宅に迎える〉

「三年為客寄浪迹 六十曠唐如疇昔(夕) 主人愛我不惜錢 能使我縱意所適 有酒如川肉如山 一日一醉百日百 是以三年頻頻來 翻(飜) 認君家為我宅 不知旅愁不知貧 総如婦家仍自得 今朝離筵別酒時 始覺三年身是客」(三年 客となり 浪迹を寄す 六十 曠唐として 疇昔の如し 主人 我を愛して錢を惜しまず よく我をして意の適く所をほしほしにまにせしむ 酒の有ること川の如く 肉は山の如し 一日一醉 百日は百 是を以て三年 頻頻として来り 翻つて君が家を認めて我が宅となす 旅愁を知らず 貧を知らず 総べては家に帰りて なお自得するが如し 今朝の離筵別酒の時 始めて覚ゆ 三年身は是れ客なりしを)」と記す詩書が現存する(注3)。肉筆と『鵬斎翁詩鈔補遺』稿には若干異同があり、後者分をマルカッコで付記した。これは歓待を受けていた燕の神保家を出発するに当たり深い感慨をこめ鵬斎が詠んだもの。越後の大地主での滞在がどれ位居心地よかったかが窺われる。

有難くも神保家ご子孫の方に取材が叶った。御宅では「三年客となり…」詩書軸の他、鵬斎書心経一卷、新保杳村詩書軸及び古記録「覚 一当家開起神保次右衛門殿ハ小高村より当所ニ御引越其渡ニ至り次新村を開発いたされ隠居右村庄屋元も開起ニ御座候…」等を拝見した。

ご子孫が燕市分水良寛史料館に寄贈された八曲半及屏風を紹介する。「観八駿圖説 柳宗元」(注4)と題し、「古之書 有記周穆王馳八駿 升崑崙之墟者 后之好事者為之圖 宋齊以下傳之 觀其狀甚怪 咸若嶮(文獻では蹇) 若翔 若龍鳳麒麟 若螳螂然 其書尤不經 世多有 然不足采 世聞其駿也 因以異形求之 則其言聖人者/亦類是矣 故傳宓義(文獻では伏犧) 曰牛首 女媧曰其形類蛇 孔子如俱頭 若是者(文獻では乎) 甚多(文獻では衆) 孟子曰 何以異於人哉 (脱字・堯) 舜(亦字は文獻にはない) 與人同耳 今夫馬/者 駕而乘之 或一里而汗 或十里而汗 或千里同(文獻では而) 不汗者 視之 毛物尾鬣 四足而蹄 齧草飲水一也 推是而至于(文獻では於) 駿 亦類也/今夫人 有不足為負販者 有不足為吏者 有不足為士太(文獻では大) 夫者 有足為者 視之 圓首橫目 食穀(脱字・而) 飽肉 絺而清 裘而煖一也 推是而至於聖人類也 然/故終不能得(於) 駿也 (脱字・慕) 聖人者 不求之(脱字・人) 而必如(文獻では若) 牛如(文獻では若) 蛇 若俱頭之間(文獻では間) 故終不能有得(脱字・於) 聖人也 誠使天下有是圖者 舉而(脱字・則) 宓義(文獻では伏犧) 氏 女媧氏 孔子氏(脱字・是) 亦人而已矣 驩驪(脱字・白) 義山子之類 若果有之 是亦馬而已(脱字・矣) (脱字・又) 烏得為牛為蛇 為俱頭哉(哉字は文獻にはない) (為龍鳳麒麟螳螂然也哉) 然(脱字・而) 世之慕駿者 不求之馬 而必是圖之似/焚之 則駿馬与聖人出矣 文化第七歲次庚午季秋上澣之日書於北越烏衣巷杳村氏之宅 武藏鵬斎龜田興禪芸」と記す。来遊中の楷書体では大粒で長文、暢達した縦長の結体による特筆すべき佳品である。既刊文献『唐宋八家文読本 二』(明治書院 S 60刊)と肉筆を比べると文字に異同と脱字が若干あり、また表装時に第六扇と第七扇とを前後逆に貼つたため、肉筆では文脈がつかない箇所がある。各部分にマルカッコで留意すべき点を付記した。なお、本作は文化七年秋上旬の揮毫作だが、前述の「三年客となり」の款記(注③)に記すおよそ四回神保家に逗留したとある一回が、この頃であった。

鵬斎来越時の当主・神保杳村について、阪口五峰編著『北越詩話』(上四巻)に伝を立てている。「字は士孝。一字、子襄。通称佐五右衛門。杳村と号す。姓劉。西蒲原郡燕町の人」として、その次に神保氏のために鵬

齋のまとめた「亦安樂窩記」の全文を載せている。本作は肉筆を見たことがないので、これによって引用したい（図1）。

また別に、「浄無塵窩 皇和文化八年夏四月 関東鵬齋老人書」と書いた四字扁額、及び神保氏への作と伝わる「酒泉堂主人」為書のある無年月作（注5）を他所で過眼している。「窩」とは穴住まい、秘密のすみかの意。

今泉木舌編著『北越名流遺芳』（三集・T7刊）の神保柳坡の伝記に「又性酒を嗜み、豪飲自ら娛む。興会すれば、昼夜連飲、遂に高斟眠りて止む。」とある。この柳坡は文化七年六月一日、六十八歳で没した。「酒泉堂主人」とは父・柳坡の別号の一つであろう。

養子とした姪が杏村である。父柳坡の没後、生前所用の壺觴を庭内に埋め、鵬齋に銘を乞い建碑をした。現在碑文は残らないが、『北越名流遺芳』に載る文を引用したい。「壺乎觴乎 予以藏之 化而歸於陶家耶 不化而永在於斯 化與不化 非吾所敢知也 今所藏者 乃居士手澤之具也 千萬子孫 來拜勿汚」と不朽を願っている。

蒲原郡燕町の人。

龜田鵬齋亦安樂窩記 北越燕驛神保子襄善讀書賦詩又善飲酒雖然非必安於讀書賦詩而樂飲酒也偶然而讀書偶然而賦詩偶然而飲酒而已未有所屬其心云今茲文已予伴島梅外遊歷於北越共訪子襄氏宿其家者數日適日日相與讀書相與賦詩相與飲酒而書善折其理詩善得其體酒善助其興然皆似偶然相對而爲之無所屬其心者矣予謂子襄曰人生有安樂地焉各隨其分而異其適今觀子之讀書賦詩飲酒之情非安於此樂於此者也子之所安而樂果何耶子襄曰我則無之矣亦偶然而已梅外在傍笑曰子襄之偶然亦皆得非子襄之安樂地乎子襄大喜即以亦安樂窩四字命其齋於是予記之 飯坂筆書之

故老傳へ言ふ、燕驛の神保氏、田園一千二百町を有し、莊宅は全邑を三分して其一を領せりと、杏村此素封に藉し、膏粱に生長して而して文墨を嗜み、初め卷菱湖に從うて詩書を學び、後ち劍雲泉を延きて畫法を問ふ。遊歴の士、龜田鵬齋大窪詩佛、島梅外等、皆な其家に高し、釋良寬、雲洞、巖田洲尾等の間人、亦た交を納れざる莫く、而して三浦岡沙は其の女婿なり。門客、座に滿ち、飲饌豐美、暇あれば則ち客と書を読み、詩書を品し、或は駢聯聯機出でて山水に遊ぶ、其の清福幾ど下

図1 『北越詩話』より

また鵬齋は柳坡の靈前に心経一卷を奠した。末尾の記には「文化六年己巳歲 余遊於北越 與燕驛柳波居士相識 淹留數十日 去而適新潟 明年夏航海渡佐州 八月再來於燕驛 居士已病而沒 余聞之 大驚 因書此經 以奠靈前 庶幾不背辱知之恩云 佛弟子鵬齋居士」としたため、供養の念を表している。

『北越詩話』では、さらに同家につき故老の伝えるところを記している。意識をかねながら紹介してみると、神保氏は田園千二百町歩を所有し、莊宅は全村の三分の一の面積に上った。杏村はこの家で成長し、文墨を嗜み、初め卷菱湖に從うて詩書を學び、のち劍雲泉を招き、畫法を問うた。遊歴の士では鵬齋、大窪詩仏、小島梅外等が逗留、また良寬、雲洞、巖田洲尾等と親しく、交友を持たなかつた人はいない。水原の三浦鵬沙はその女婿である。門客は座に滿ち、飲饌豐美、暇あれば客と書を読み、詩書を語りあるいは出でて山水に遊んだ。「その清福幾と（ほとんど）下界の人にあらざるなり」「鵬齋、杏村に舍する尤も久し」、別れに臨み詩を留め「三年為客寄浪跡」とよんだ。天保二年（一八三一）、五十六歳で没す。鵬沙の姪孫・三浦桐陰に聞いたところ、杏村の書畫はともに「境に入る」と。五峰はこの文末に三絶詩を記録し「亦た清才あり」と称讚している。

右の文によれば、杏村は相当な詩書畫の技量を有していたようである。残念ながらこれまで過眼した畫作は一点もなく、書も一点のみだが、文にあつた通り卷菱湖に近似したのびやかな書軸であつた。

また今日、他者に保存される新潟県指定有形文化財・劍雲泉作六曲一双屏風には「戊辰秋九月重陽後三日 作於杏村書屋 為劉契兄子襄 劍就」とまさしく杏村への為書を物語る款記が読める。これは鵬齋来越以前、文化五年（一八〇八）旧曆九月十二日の作になる。杏村と雲泉の親交の有様と、杏村の畫作に寄せる思いを想察させる大作である。稿者・岡村は平成十六年十月「出雲崎町ゆかりの文人 劍雲泉を中心として」を出雲崎町良寛記念館において企画開催した折、本作を実見借用した。

さらに分水牧ヶ花・解良家珍藏とうたわれる明拓思古齋石刻の黃庭經・蘭亭叙拓本冊子の跋文に、この拓本が元は神保家に伝わったものであることが読める。

大王の書は世遙かに歳久しくして蹤蹟煙銷して終に再び之を問ねるに由無し。而れども思古齋の収むる所、稍其の蹤を窺うべし。此の帖は越後の神保氏の書架に旧挿する所なり。洵に神物の呵護する所、知るべきなり。神保氏其れ宝惜せよ。辛亥夏五竹迷の日、亀田梓識す。大王、つまり王羲之の書は今日あとかたもなく窺い難いが、この思古齋法帖にやや痕跡を偲ぶことが出来る、と書き出したのは鵬斎の嗣子、亀田綾瀬で、嘉永四年（一八五二）五月十三日に親と同じく神保家に身を寄せて跋文を揮毫したのである。杳村の次代に当たる。

続いて、安政二年（一八五五）晩春に記した地元吉田町の儒家・鈴木文台の跋がある。途中から引用するが、

余三十年前、此の帖を神保氏の書堂に覽ることを得たり。当時主人矜尚して余に示せり。余も亦目を措つて之を觀る。神保氏、物故して其の蔵せし所の編籍書画は雲散霞滅せり。此の帖も亦誰氏の手に落ちてしを知らざるなり。而して今忽ち解良氏の蔵となる（後略）。

といい、文末には「物好む所に聚まる、之を獲ること良に難し、之を守るも亦易からず。…豈に必ずしも一墨帖の云いのみならんや」と文物の伝世の得難きを記述している。

当の解良家十三代、栄重は『良寛禪師奇話』を記し残した人物である。栄重もまた一文をこの帖末に付して、安政二年九月二十日、所用で江戸に赴く時に愛蔵するこの思古齋帖を携帯、余程に本冊を大切にしていたかが分かる。江戸滞在中偶々大地震に遭ったが、幸い拓帖は「神物の呵助」によって無事であった。翌年には本冊が盗難に遭ったが、のち見つかるという重ねての奇幸を喜ぶ文面である。

跋文は続く。鈴木豹軒によるもので、大正二年癸丑四月、京都において蘭亭修禊の故事にならない盛大な雅宴が企画された。当時京都帝国大学教授だった豹軒は運営に当たることになり、ふるさとの思古齋法帖を犬養毅、羅振玉蔵拓蘭亭叙と並べ出陳したと記している。

このように貴重な歴史を刻む四家の跋文を持つ名帖の所有者は神保氏であり、そのことも綾瀬及び文台の跋文があったからこそ窺い知れるものだった。往時の神保氏の文運振興の様が、先述の鵬斎留別詩とこれら

旧藏品によって推知出来るよう。

なお松澤佐五重著『良寛さまと周邊の人々』（H13刊）に、思古齋法帖拓の影印が収録されている。

関連する資料として、佐渡の弟子・矢島主計宛文化八年二月二十日付鵬斎書簡に「陽春之慶賀山川無阻隔御同意奉祝候 尊大人相序被迎新陽恭悦之至奉祝候 次老拙事無異二加驢年候 去冬帰府之積りに御座候処北越被留無余義 燕と申所の神保佐右衛門と申人之処二淹留いたし候 然所春來大雪ニテ中々発足難致今以此地に罷在候 此地二月十四日迄毎日荒申候而雪降簷迄も高サニ相積り候 殊に余寒甚敷無拋炬燵二のみ縮頭いたしこもり居り候 乍然幸に無事ニ罷在候間寛懷可被下候 尊大人病氣いかか二御座候や案しられ候 御老母次二令聞令愛御息災ニ御座候や承度候 此地よりハ近き事なれども荒海波濤相阻み自ら疎闊ニ御座候 さてさてなつかしく奉存候 江戸表ニても皆々達者なるよしニ御座候 御省慮可被下候 浅草紫苔豚犬より遣し候故少々ながら佳愧入候へとも老人へ呈候也 閏月初ニ此地発足ニ而帰郷の積りニ相極メ候 其上江戸よりひたすら催促ニ御座候 帰郷の上寛々以手紙可申上候 先ツハ案否旁々如此御座候 皆々様へよろしく奉頼上候」とある。そうすると、少なくとも二月二十日頃までは燕に居候を続けた。杉村英治氏の先行研究『亀田鵬斎』（S53刊）によれば、◎与板・新木小自在画像讚◎石瀬陣屋・岩田美喬の「喬山府君墓碣銘」（注6）◎弥彦村泉村住・仙台人福島憲の「蘭陵先生墓表」◎尾張藩儒者の細井平洲門・木下從之の「素洲先生墓碣銘」◎大田村庄屋・金子藤市の「蒼龍園記」等諸方から依頼の書きものに応じていた。とはいえ心は確実に帰途を向いていた。

中から「喬山府君墓碣銘（図2）に少し言及したい。碑に出てくる岩田氏、喬山はその諱、先祖は武州鉢形城主・北條氏に仕え、のち子孫は仕官して縁あり天明五年（一七八五）北越石瀬代官所に務め、寛政十二年その地で六十一歳にて没す。子息・未は同じく石瀬代官所の人となって十余年、いよいよ江戸へ帰ることとなった。そこでやはり東帰を目指す鵬斎に、父の顕彰碑の撰書を依頼。

関連して棚橋宏氏編著『石瀬に記された亀田鵬斎の足跡』（私家版・H



図2 「岩田喬山墓碣銘」 拓本

23刊)の論考を紹介したい。

氏の自家は文化七年二月「題北越石瀬棚橋樸民庭園雙松」詩書を鵬齋に与えられた、当時岩瀬村庄屋で、当主は二十八代・道利(一七八一—一八四一)。その子息に当たる方が棚橋利忠、『北越詩話』に伝のある岩田春塘(本名萊)と詩をよみ合った仲であっただろうこと、また『北越詩話』にある「春塘」は本碑を建立した岩田末と同一人物であろうこと、さらに巻町大原の鵬齋書碑「天満宮碑」(鵬齋先生文鈔)所収「菅相公賛」を建てた山田元吉の弟・重弘が石瀬の棚橋家の婿養子になっていることなど、岩田、棚橋、山田各家と鵬齋の関わりについて他書で読めない記述を綴られている。

〈二月、田上・酒井氏のために「瀟月幽香」を書く〉(注7)

〈春、六曲一双屏風を書く〉(注8)

〈二月下旬、新津・本多氏のために逢故齋沸乳方紀事を書く〉(注9)

〈二月中、見附へ着 三月十三日、見附・愛宕山に登る〉

当地大庄屋で織物業の始祖、俳人でもあった金井貫左衛門(注10)・

一七七三—一八三三 号・杉亭)の子孫の元には、「北游之次滞留越之見附鎮一日同諸子上愛宕山眺望焉 時辛未三月十三日也 武藏鵬齋亀田興禪龍」(注11)と落款の入った書幅が残る。これを用い昭和四十七年、愛宕山(現観音山公園)に詩碑が見附市観光協会によって建てられた。金井家には他、鵬齋小品及び先祖の書きまとめた蔵品目録中に、鵬齋来訪に関する記載を見出した。なお前掲の詩に「諸子と愛宕山に上った」とあるから、同行したのは金井杉亭だけではない。調査で判ったのが、附近の素封家である文雅を愛した渋谷家である。同家のために鵬齋が書き贈った扁額二点(注12、13)と、当時持参した自用印を一括して捺した一紙を拝見した。この渋谷氏のような方が一緒に眺望を楽しんだ人である。印影ははっきりと捺されたもので、真贋の見極めが難しい鵬齋作を吟味して鑑賞しようとす際の貴重な資料になる。

また見附市内・智徳寺(注14)には大のぼり「金毘羅大権現」一対が現存する。「文化八年辛未春二月 江戸鵬齋亀田興沐手書 山口紋藏 大越善八」と寄進年月と寄進者が確認出来、よって見附来訪が二月終わりにはあったことが窺えるわけである。

耳取の庄屋・井上家には「青鬢館」(文化辛未春三月)扁額が残る。井上忠右衛門・五藏父子の私塾名を記したもので、青々とした松の如くはつらつの意を持つ。

〈三月下旬から四月、長岡へ〉

長岡市四ツ屋の清水家には「辛未春三月於廣麗閣」、「為蒼龍館」と入った六曲一双屏風があり、書は引き締まって出来がよい(注15)。他、「蒼龍館 文化八年龍舎辛未夏四月関東鵬齋書」の絹本扁額や、代々医家を務めた家ならではの「儒和醫調」扁額もある。当主は清水龍之介(注16)、雪海と号し画をよくした人で、二月二十九日付清水氏宛書簡に近日中に見附まで行くので足を延して長岡まで伺いたいと述べる内容が読める(注17)。ということは、かねて見知った間柄であった。中越地区における見附から長岡へのルートがこれらによって明らかになった。この家は、高久靄崖・五十嵐主膳・谷文晁等と交流があった。鵬齋書では別に四ツ屋の天満大神

宮祭に掲げられる氏子一同奉納による「天満大自在天神」一対の大的ほりがあり、これも清水家滞在時の書だといわれる。筆者が確認したのは複製〔長岡新聞〕H11・5/29付参照〕による。

#### 〔四月中、越路町・高橋氏のために「甘棠亭」を書く〕

筆者は平成十一年 長岡市立中央図書館で「江戸文化の華 亀田鵬齋展」を開催した時、この扁額(図3)をご当主・高橋健吉氏から借用展示した。三文字は中国古典に典拠のある、徳政を行う、の意を持つ。そもそも高橋家とは中越有数の地主で、代々「九郎右衛門(通称九郎)」を襲名、その九代目当主の事績を中心に現在、地域おこしの活動が行われている。資料「史蹟巡りマップ」などによると、九代九郎は地域振興に生涯を捧げた政治家・企業家・篤農家と位置付けられ、小作人と相互扶助の関係を築き、地元の人々に慕われてきた。神谷信用組合設立、チューリップ栽培などその手腕による事業は多い。

筆者がとくに注目したのは中央公園に建つ「高橋報恩記念碑」で、碑陰には多方面にわたり地元を貢献した謝意を表す一文(注18)、碑陽には十一代友二郎の直筆「温故知新」四字を刻む。その署名部に押した雅印には「甘棠亭」と刻してあり、前述の鵬齋書額にしたためてあった三字亭号が、のちの世まで当家で受け継がれていたことを小印が語っているのである。高橋家系図によると鵬齋の来遊は七代九郎右衛門(文政十一年・一八二八没)時代のこと、筆者が縁を頂いた健吉氏は十二代目の御

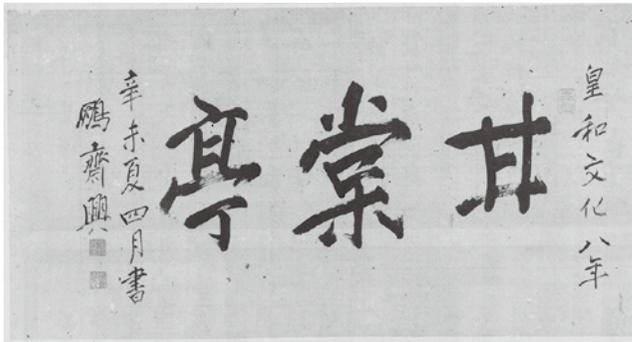


図3 「甘棠亭」扁額

方である。

#### 〔四月中、柏崎・高桑氏のために「旅懐海濤」を書く〕

平成十二年七月「柏崎市制六十周年記念 柏崎ゆかりの文人展」を企画開催した折、本作を実見借用した。「文化八年辛未夏四月書為 柏崎高桑厲叔契 関東鵬齋興」と款記にある高桑氏は、柏崎の医家。同家もしくは同族の方と思われる人物・高桑毅の伝記が『北越詩話』(上 巻六)に載る。「字は必中。通称为亮。米嶂と号す。一号四十八翁。柏崎の人。」とまず記し、元は加賀の高桑谷から天正年間に柏崎に移った。この米嶂は窮民に対し効薬を施した善医として知られ、嘉永五年(一八五二)四十九歳で没す。鵬齋書額を取材した折、原脩齋の画讃のある高桑米嶂肖像画をあわせて拝見した。本作の画讃文が『北越詩話』記述の元になっているように読める。鵬齋と関わった人物は、この先代時代の御方であろう。

〔四月十六日、地藏堂・中村氏のために「瀧水亭」を書く〕—「瀧水」とは清水のことで、酒造業を営んだ同家にふさわしい文といえよう(『墨美』一四八号所収)。款記に「皇和文化八年初夏十六日 鵬齋老人」と書く。中村家は分水町地藏堂の旧家。良寛の父の生家・与板の新木家・小自在は良寛のいとこに当たる。小自在の娘・むろがここ中村権右衛門好哉(一七八六―一八四四)の嫁になった。好哉宛良寛書簡四通、むろ宛錢四百文受取状が伝わる。この家に良寛は剃髪前に下宿し、大森子陽の狭川塾へ通ったという。以上のように良寛と親密な家に鵬齋は接点を持った。

〔四月中、出雲崎・敦賀屋直右衛門のために「聚遠亭記」を書く〕—敦賀家は出雲崎町住吉町の旧家・鳥井氏のこと、良寛の生家・橋屋山本氏、京屋野口氏と並び当地御三家と称された。永らく出雲崎代官所は出雲崎町に置かれ、山本氏の所管だった。その代官所を隣の尼瀬町に移そうと野口氏を中心に画策、双方相対してやがて代官所の尼瀬への移転と共に山本家は衰退する。二町の間の確執に合わせ、山本家では鳥井氏と同町内における主導権争いを起こされ、山本氏没落の主因となった。鵬齋来遊時は、良

寛の弟・由之がついに家財取り上げ所払いの判決を水原奉行所より下されたところに当たる。直後、鵬斎はこの扁額を鳥井氏に書き贈ったのである（注19）。近くの尼瀬・京屋野口氏には「北海雄風」扁額を贈るなど、少なくとも遺墨から察する鵬斎の動向には、良寛生家を慮るような行為は見られない。他二家との交流を持ったのが自然な様子であったことは、野口と鳥井何れも俳諧文雅の道を愛好する当主を輩出した家柄によって察せられる。

ちなみに野口家主人・寛猛（号天籟）は柏崎の旧家・山田家のお出で、經濟の才あり、鵬斎時代よりのち、天保年間には官許を受け函館用達の北海漕運の端を開いた。『北越詩話』（上 巻五）によると「客を好み。文士を敬重し。亀田鵬斎・柏木如亭・巻菱湖・原松洲の如きは兼て師弟の誼あり。」「鵬斎尤も其人を愛し」と綴る。

今、鳥井家跡は芭蕉園と命名された公園に姿を変え、そこには佐藤耐雪が中心となり、「銀河の序」を刻む全国でも珍しい芭蕉直筆の碑文が建つ。稿者は、この鵬斎書扁額を所有者である尼瀬のくるまや旅館主・加藤幹一郎氏のご好意で、平成十一年に撮影させて頂いた。氏は史料の町外への流失を防ぎ、旧家から出た土地ゆかりの貴重品の蒐集に並々ならぬ力を注いでおられた。

〈四月中、小島谷にいたると推定〉

三島郡小島谷では、久須美祐之（逸翁と号す）の住雲園に寄る。子孫は越後線の礎を敷設した程の巨財を有した。現在庭園は保存され、杉聴雨書碑が建つ。ここで鵬斎は一詩を作った。名園の静寂をよみ込んだもの（注20）で、『鵬斎翁詩鈔』に「山中独坐」と題し収録される。

この地も他、大窪詩仏、市河寛斎等文士の逗留先となっていた。戊辰の役に際しては、西軍に加担、東軍は久須美家に本営を敷いたが、火を放って退却、よって鵬斎が来遊した逸翁時代以来の文人墨客の足跡をたどる文物は全て灰塵に帰し、庭園に一部残る松のみが江戸期を伝えるものだけという。

『北越詩話』の編著者・阪口五峰と同じく衆議院議員仲間であった久須

美東馬が広大な土地を提供したところは弥彦公園となり、顕彰の銅像が建つ。父・雪堂も議員、越後鉄道を敷設する運動を興す。余事に画を描き、これまで下絵の類を数作実見し得た。『元久須美雪堂翁遺愛品目録』と題す同家の売立目録があり、昭和三年十一月二十四、五日下午見、会場は新潟市不動院。江戸後期以降儒者もの、南画、維新の元勳の筆蹟が目を引き、中に「一五 鵬斎 雲泉碑書 堅五尺 巾二尺一寸三分」まぎれもなくこれは出雲崎町良寛記念館に建つ碑文の原本である（図4）。鵬斎書碑は、鵬斎が文化十一年（一八一四）に雲泉三回忌を期して揮毫して以来、一〇七年後の大正十年（一九二二）によりやく東京で南画研究団体「又玄画社」を率いる大村西崖の後援を得ながら建立にいたったのである。大村西崖は『雲泉遺墨集』（大正十二年刊）をも編集、その序文に、「雲泉が備後に居た時の門人の檀謙蔵と越後へ来てからの門人の行田八海とが、鵬斎に頼んで碑文を描いてもらったけれども、高田の門人倉石乾山がそれを模写して石に刻し、上杉村の禪長院に立てただけで、刻も悪く、處をも得ず。墓石も漸く百年忌の明治四十二年に、出雲崎の有志佐藤吉太郎氏等が建てたのが、町の後ろの二子山に在った。予は先年密灌の縁で越後に遊んで、佐藤氏の案内で雲泉の墓に詣で、我が国近古南宗画の木鐸とも称すべき雲泉が、碑さへ建てられずに居るのを気の毒に思うた……。」と述べ、そこで自ら大正八年に結社した画社に図り石碑を作り上げ、町に寄贈。大正十年六月二日に全社員臨席のもと除幕式を行い、この時六月四・五日の両



図4 「雲泉山人墓銘」肉筆

日、新潟市内で遺墨展まで挙行する念の入れようで、当時の記録集が『雲泉遺墨集』なのである。西崖によって雲泉は顕彰されたといつてよい。

もう少し雲泉没後から建碑までを記す。初めは文化十二年五周忌に際し追悼画会を催し、鵬齋撰書山人墓銘の建立のため石を二子山へ運び上げようとしたが果たせず、雲泉が身を寄せていた浄邦寺住職・菅泰峨が文政十二年（一八二九）十月二十九日に没してしまつた。のち鵬齋碑文肉筆を高田の倉石米山の遺児・乾山が借りうけ中頸城郡上杉村の禪長寺（三和村大一五〇六・少林山禪長院）に建てた。「先生之碑 檀讓嘗欲建之 有故不果而没於是 予輩合志刻石移建設頸城郡村岡邑禪長院云 門人青木茂久川上達菽室書」と碑文末にある点が出雲崎に建つ碑と違うところである。因みに同寺二十世は雲泉に画を学んだ。鵬齋原本は中頸城郡高土村の川上松岳が保存し、のち川上善兵衛が阪口五峰に譲つた。そして三島郡小島谷の久須美氏「住雲園」売立目録に姿を見せて以降、行方知れずになつてい

る。久須美郎は何度かの管理上の変遷をとげ現在は長岡市の下、一般公開されている。筆者は「和島地域の宝磨き上げ事業」の一環で

○久須美家ゆかりの文人墨客展（H 27・6 / 12 / 21）

○住雲園での屏風いろいろ展（H 28・6 / 18 / 26）

の企画展について監修をした。見出せた往時の書画は少なく、中では明治の三筆・日下部鳴鶴書「陽谷館」が、ここに里帰りを果たせたゆかりの作である。

〈与板へ〉―与板の新木小自在や燕の神保杏村、鉏雲泉に見送られ小千谷へ向かう。雲泉との別れの時が来た。雲泉は大粒の涙をこぼし鵬齋の姿が見えなくなるまで手を振り見送つた（『鵬齋翁詩鈔補遺』所収「留別鉏雲泉」）。その後、雲泉はこの年、出雲崎町のけんどん屋なる食堂にて脳卒中で倒れる。往来先の浄邦寺にかつき込まれた時にはまだ虫の息があつた。

急ぎ三条にいた夫人と子息を呼んだが、あえなく没す。墓は良寛記念館敷地内に現存。隣りには鵬齋撰書による「雲泉山人碑銘」が並んでいる（注21）。鵬齋はしばらく雲泉の急逝を知らず小千谷から十日町へ、妻有に到る。

〈四月、小千谷にて船丘神祠碑の撰書〉

豪商、佐藤半左エ門（重親）はゆえあつて小千谷の丘陵地・船丘山に稲荷神社を勧進し、その由来の撰文を鵬齋に依頼した（注22）。佐藤氏縁者・佐藤齋庵氏の手元には、亀田綾瀬の書いた木製看板「酢醬油 己酉冬十月 応北越佐藤氏雅嘱 綾瀬書」が伝わつた。鵬齋書碑は天保十四年八月建。

〈四月、蘭亭後序詩・六曲半双屏風を書く〉

小千谷市中心地にある寺院での揮毫作で、「文化八年歳次辛未夏四月写于越之小千谷龍久山精舎」と款記にある。

〈五月一日、小千谷付近にて「歌儂遊戯」画題を記す〉

「文化八年辛未夏五月朔 鵬齋老人興」と款記にある。

〈十日町へ、中条・円通寺住職の維寛を訪れる〉―円通寺は土地の名刹。

維寛（一七七七―一八五〇）は江戸で鵬齋門となり、帰郷後、後進の指導に努めた。その縁者の方が鵬齋及び同時代の文士書簡文書を保存される。付近の旦那衆中、とくに岡田氏は画をよくする家系で、鵬齋・雲泉の来越時に教えを乞うている。岡田家の記録に五月二日、鵬齋・雲泉共に同家に寄つたという。岡田香雪（一八二二没）―雲洞（一八〇二―一八七五）―耕雲（一八三九―一九二三）梅壑（一八四一―一九一五）兄弟―正平（一八七八―一九五九・新潟県初代民選知事）となる事業家・政治に功がある名家。香雪宛鵬齋書簡が一通ある。『今に伝える中条の遺墨』（十日町市中条地区公民館発行）参照。この地の医家の尾台榕堂（一七九九―一八七〇）は亀田綾瀬の門人。流麗な書が残る。与板の新木小自在宛鵬齋書簡には「扱々当年太子堂よりして分手、それより御疎濶に罷過なつかしく被存候……」といい、中条地区（端村）で鵬齋は一向と分かれたのだつた（文化八年十二月八日付）。

〈十日町・酒井氏宅へ。「積翠荘記」「積翠聳碧之屋」扁額を書く〉―酒井氏は当地広域を統括する大庄屋。鉏雲泉が家の庭園を築く助言をし、鵬齋

はその風光明媚を「積翠荘記」にまとめた。二人の合同築庭作業を文化六年往路とみるかこの時とみるか双説ある。「積翠荘記」は原蹟未見。「中魚沼郡風土記」、「中魚沼郡誌」所収の文によれば、文化八年三月撰文とある。これはあるいは「五月」の筆跡を「三月」に見誤ったものか。三月はまだ長岡辺りの巡遊と思われる。ともあれ、ここまで二人は一緒の道中だった。「辛未夏月寫於積翠山房之涼処 西肥 釧就」との自画讚雲泉作があり、両者同行中最後の作となる。前述したように鵬斎と別れるに際し、雲泉は姿が見えなくなるまで手を振り大粒の涙を流したという。それからおよそ半年後、出雲崎の食堂「けんどん屋」で雲泉は急逝。鵬斎はその死を知らず、旅を続ける。雲泉三周忌に依頼を受け、「雲泉山人墓銘」（「善身堂遺稿」）を撰書するが、故人を回顧する内容の同碑が出雲崎に建ったのは年月を隔て、前述のように大正十一年のこと。

二人の交情を偲び、酒井氏積翠荘に伺った。裏山から庭に引かれる湧水が噴き出る様、美しい水流の紋が浮かび出たこの泉石は往時のままだという。奇石には古い刻と思われる鵬斎自筆の銘文（注23）が風雪に耐え残っている。庭園入り口には室内の「積翠聳碧之屋 文化八年昭陽協洽夏五月十有八日書 関東鵬斎興」（絹本・扁額）を原寸大で石に刻したモニュメントがあった。ここが十日町市指定文化財になった折に記念して作成したという。家の方の了承を得、暮春の中で二石の採拓を行い珍として保存している。吉田地区公民館編「積翠荘」解説書を有難く頂戴した（十日町山谷は旧吉田村）。

酒井氏について郷土史諸本に触れる内容は多いが、一例として小林存著『中魚沼の物語』（増補版・S31刊）に当家、当地方と鵬斎との味わい深い関連記事に読める。

〈十日町山谷から信濃川西岸に沿い、津南へ〉——大井平村庄屋の保坂甚右衛門（松園と号す）宅へ寄る。大井平村とは妻有山中。妻有秋山郷一帯はよく知られる越後の行き詰まりで、したがって鵬斎の越後路での動向もこの地点で報告が終わることになる。本県での最終地で、五月二十二日「大井平瀑布記」（注24）「題瀑布」詩を作った。またこの日、加茂の医者、森

田静斎（一八二七没）宛に書簡を發し、再訪出来なかったことを気にしながら、別れを告げている（注25）。本県を去るに当たり、同様の文を他の人にも多く出したであろう。

### 結びにかえて

いくつか視点を挙げてみる。

とかく鵬斎は、良寛書のひき立て役とされる。大量にみうける草書で比見するからである。しかし、越後遊歴中の作を通覧して分かったのは、殆どは楷書であった。江戸の文士儒家は、知名度が高い人物でもその書を取り上げ鑑賞に堪えうるものは案外少ない。就中、鵬斎の楷書の書風は相当独自色を備え、それはとくに逗留地で依頼を受け記した扁額に發揮された。款記には庭園や家屋に陣取った折の風流さを巧みに漢文に綴った言辞が付

され、家主の欲待に対する鵬斎の誠意が満ちている。華にして侈ならず、樸にして俗ならず、人となりがよく出ている。

江戸時代多様な分野の文人墨客、騷客が来越した中で、鵬斎は本県文芸奨励上各地に種をまいた恩人で、またこれほど長旅を続けた足跡を具体的に辿れる人物は他におらず、近世越佐の文芸水準を採るための大切な研究対象といえよう。

鵬斎は東帰を果たして以降、江戸の川柳に書の変調をよまれるほど、文芸において一皮むけたようである。総合的にみると、越佐の私塾の学問を励まし有力な地主層に個性的な詩書を残した鵬斎は、間違いなく本県近世文芸界の牽引者である。一方、鵬斎自身にとっても晩年江戸の文壇の中心を担う位置付けに成長する糧を、越人のもてなしから吸収したと思われる。

例えば与板の新木小自在が鵬斎と別れ三年余、文化十二年六月、五十八歳で逝去した。その折、「聞北越小自在隱居之計」と題し、「三年留越の日 臆を被くは定めて誰となす 雲浦（出雲崎）相い逢う処 海楼共に倚時 炬を囲み酒を温め 棹を進め月に詩を吟ず 往時渾て夢の如く 夢中還た疑を著す」（鵬翁詩鈔補遺）と挽詩を作った、北越地方の重立や書画家は中央の大儒を、われこそはと厚遇したのだが、人々の応接は鵬斎に

とつても忘れ難いものであった。

この「聞北越小自在隠居之計」詩は、今日詩集の版本印刷によつてのみ読めるのだが、杉村英治氏著『亀田鵬齋』（近世風俗之会・S50刊）の一七三頁に肉筆が挿図にみえる。氏は東京大学図書館に勤務され、鵬齋については他にも

○『亀田鵬齋詩文・書画集』（三樹書房・S57刊）

○『亀田鵬齋の世界』（三樹書房・S60刊）

の御仕事を残されている。稿者・岡村はこれまで

①「江戸文人の華 亀田鵬齋展」長岡市立中央図書館 H11・6

②「出雲崎町と亀田鵬齋」出雲崎町良寛記念館 H12・10

③「亀田鵬齋書の世界」須坂市立博物館 H18・7

④「震災復興記念 亀田鵬齋展」小千谷市総合産業会館 H19・10

⑤「良寛と亀田鵬齋傑作選」良寛の里美術館（長岡市）H24・9

の鵬齋企画展を監修させて頂いたが、端緒となった①展の開催に当たり、杉村氏から助言と大切な方々のご紹介を賜ったことが、以降鵬齋を中心とする近世近代文人研究着手のための原点となった。

とくに鵬齋ご子孫の亀田光夫・秀子様御夫妻、貴重な書画資料について星名四郎氏をはじめたくさんの関係者との直接的なやりとりが出来たのは氏のおかげである。

いうまでもなく、杉村氏の北越に來られ現地を辿った調査成果と資料読解の大きな業績を参看し、三十年後改めて県下鵬齋の足跡を追究する実地調査を開始、継続してきた次第である。

少し前の行に触れた新木小自在のことにように、杉村氏の著書にしか見えない資料がたくさんあることが分かった。一方岡村の視点は、鵬齋の動向を主軸としつつ中央の名流の受け皿となった地元文人の事績の発掘に意を置くようになり、調査の目標としては越人の文化許容度を追究することを主たる研究テーマに据えて今日に及ぶ。

なお杉村英治氏をご紹介くださったのは、国上山本覚院の渋谷啓阿氏で、渋谷氏には杉村氏の調査行に接した当時の回想記「杉村英治先生 アデイスさんと邂逅」を『江戸文人の華 亀田鵬齋遺墨集』（前掲①展図録・

H11刊）に寄稿して頂いた。全国良寛会参予の駒谷正雄氏も杉村氏を御紹介頂いた御方で、氏の御蔭で入手した情報は数多い。

主要参考文献については文中に表記したが、先人の貴重な調査活動に改めて学恩を感じつつつ欄筆する。最後になったが、遺墨所蔵家の方々には多大なるご協力を賜り、心よりお礼申し上げたい。本文掲載作は、すべて現物より撮影したものである。

## 注

1 中越地震で倒れた小千谷市内に建つ鵬齋書碑「船丘神祠碑」が元の状態に戻された。平成十九年十月二十七日、二十八日に「震災復興記念 小千谷市亀田鵬齋展実行委員会」によつて小千谷市産業会館で鵬齋展を開催、その記録集として『亀田鵬齋総集』を出版。全五四〇頁、岡村編著による。

## 2 萬巻樓記

新津郷者 新發田侯封内之地也 桂氏世爲郷之長 筭轄一郷租稅力役水旱爭訟之事 今長公德之父至誠翁 幼而好學 捐財購書 而裏之後園構樓以插之 上自經史 下至百家小説 凡數萬卷 號曰萬巻樓 架上牙籤 風吹而互鳴 篋面字號 日照而相映 翁官務之餘間 上此樓而讀之 或隱几攤之 或擁膝翻之 每卷自句之自乙之 其樂尤深矣 而翁非獨樂之而已 願使子孫讀之 又願使郷人讀之 其志尤厚矣 若夫爲子孫兄弟者 上此樓 讀此書 窺聖賢之心 不走浮靡之途 佔俸之聲 朝夕盈耳 則爲人之父者 其喜何如哉 若夫在郷里郷黨者 上此樓讀此書 知孝弟之義 不顧奢侈之風 吾伊之聲 朝夕盈耳 則爲郷之長者 其喜何如哉 嗚呼 翁築此樓藏此書 縱觀不厭 惜覽不惜 使子孫兄弟 深得聖賢之心 以知順上恤下之道 又使隣里郷黨之人 和睦相扶 勤農敬官 而爭訟絶而弗發 則斯樓之所養者 豈謂不大乎 庚午之歲 余北游 主桂氏之家 公德之子士師 亦頗好學從余而問道 遂奉父命請之記 因書此言以扁其樓焉 文化七年庚午 冬十一月 東都 鵬齋興撰（総集）166作・『善身堂遺稿』所収）

鵬齋は、新津の桂家に招かれ「萬巻樓記」を撰している。当主は桂家五代の成章で字を公德、新発田の代官職を務めていた。「萬巻樓」は公德の父・誉章、字・致誠が、中国の古典籍をはじめ数万巻に及ぶ書物を蒐集した書庫の名。なお本記には文化七年十一月と十二月に揮毫した二作があった。

3 また肉筆軸（128×56センチメートル）の款記には「留別神保子襄余游北越者已三年其間来子襄之家而止宿者凡四矣 其受厚誼者不少臨別憂悶殊甚欲賦一詩以留之思不集因援筆謾述言爾 鵬齋亀田興草具」の一節が付記してある。

4 柳宗元（七七三～八一九）は、中国唐代の文学者・政治家。王維や孟浩然らとともに自然詩人として名を馳せ、散文の分野では、韓愈とともに古文復興運動を實踐し、唐宋八大家の一人に数えられる。

「観八駿圖説」は周の穆王が八頭の駿馬に車を挽かせて天下を周遊したという故事にちなみ、後世になると実体に合わない図画や文でそれをまとめるようになった。奇異なものを得ようとするあまり本質がおろそかになる。これは外形ばかりを重んじ聖人を見出せない人間界でも同様のことが言える、との警句を含む。

5 莫追我夢費尋思 夜々夢新夜々奇 今宵不是昨宵境 莫問莫聽説也癡  
黄粟一炊夢未還 床頭卸足浸潺湲 座間惚恍阿誰在 臥看芙蓉萬仞山  
為酒泉堂主人 鵬齋老人興書（『総集』167作）

6 喬山府君墓碣銘武藏 龜田興讓并書

君諱美喬俗稱富右衛門姓岩田氏 武州關山人也其先諱某稱河内世仕鉢形城主北條氏豊臣公征關東鉢形已陷北條氏滅河内戰死其子尚幼逃於關山村而潛居田間者六世至君始出而筮仕焉君為人也孝恭溫柔仁篤慈惠砥節礪行直道正辭其貞固足以幹事其隱括足以矯時又工算數之術廼為勸農使厲吏居甲信二州之奉地者數年天明五年属佐藤公從居北越寛政十二年庚申正月二十八日遭疾而歿于石瀬之府春秋六十一乃葬石瀬種月精舎之後法諡曰喬山居士君娶力丸氏女生男二人曰松蚤死曰未今現紹箕裘仕于石瀬之府女三人一女蚤死二人皆嫁君常謂曰官吏與斯民為一體同胞之親斯民之病猶吾手足之痛也凡吏于土者牧民固本之義不可不詳焉其愍民之志尤厚矣未繼職在

越者十餘年今茲以瓜期既滿廼將東歸時余游于越因請余銘石表墓乃為之銘銘曰心存至誠視民如傷體仁無私奉法維平同僚稱公下民稱正嗚呼可謂循且良矣 文化八年辛未春二月 男未謹建（『総集』489作）

7 澹月幽香 北越田上之酒井氏後園植梅花數十株春色滿園暗香襲人月夜殊勝云因書此四字以扁其屋 文化八年辛未春二月 武藏鵬齋興書（『総集』168作）

8 老夫渴急月更急 酒落盃中月先入 領取青天餅入來 和月天和都醜濕  
天既愛酒自古傳 月不解飲真浪言 舉盃將月一口吞 舉頭見月猶在天  
老夫大笑問客道 月是一團還兩團 酒入詩腸風火發 月入詩腸冰雪潑  
一盃未盡詩已成 誦詩向天天亦驚 焉知萬古一骸骨 酌酒更吞一團月  
楊萬里對月酌酒之詩 寒食淒涼作不成 春光取次又清明 孤臣氣味愁鑽  
火 故國心情記賣錫苦恨落花隨 柳絮誇勞啼鴉換鶯聲 東風誰喝吳娘曲  
暮雨蕭々 閤禁城錢牧齋寒食後一日作 五百年來續此遊水光依舊 接天  
浮徘徊今夜 東山月恍惚 當年壬戌秋 有客得魚臨 赤壁 無人載酒出  
黃州詩 成一望詩山寂 孤鶴橫空掠 小舟羅念菴遊赤壁之作 辛未春  
武藏 鵬齋興書（六曲一双のうち半双・『総集』169作）

9 逢故齋沸乳方紀事 東都 鵬齋亀田興讓

北越蒲原新津郷 故長本多孝祖 初居於天澤新田邑 世為邑之豪族其為人 慈仁而有才國主新發田侯聞之 舉以為新津郷之長而筮一郷之事 孝祖視貧民舉子而乳不出者甚憫之常以為己之憂 廼廣就醫士而求其方博探方書而究其法 乃施之人以試之 雖然其方未得有奇特之效驗者 深以為憾焉 年七十二而沒 其易簣之日遺言其子源實屬之以其事 源實奉遺言窺玉函 寶冊紫臺八會之書 又求田舍試驗 細碎單行之方衷以為冊子而藏之其家其歲新津郷為關東羈府之奉地 源實欲紹先人之志 於是辭職 而學醫術遂業岐伯俞跖之道 泛救郷民之疾患 没年五十七歲 其子芳充雖不為醫術亦繼祖先之志 以其方施人 頃者郷有乳之不出者 來而請藥 乃緋先人所衷之書 調劑一方以與之 僅服二貼乳沸而迸出 一郷皆以為奇芳充大喜以為是皆祖先精誠之所得慈仁之所致也 於是請余記其事 余曰朱晦菴云陽氣所發金石亦透 精神一到何事不成 嗚呼 累世之慈仁天之所感者然也 辛未閏月下浣（『総集』170作）

10 見附の里正。『金井貫左衛門・杉亭彬杉亭遺稿・発句集』(H28刊) 参照。  
11 欲上高丘窮北阪 摩挲老眼睫難収 碧空連海塞雲盡 緑野接天春色稠  
寒影浮盃千嶂雪 晚晴入畫一川流 醉來并採能州景 吟向雄風憶越侯

北遊之次滞留 越之見附鎮一日 同諸子上愛宕山 眺望焉 時辛未三月  
十三日也 武蔵鵬齋龜田興禪龍(高丘に上り北阪を窮めんと欲し 老眼  
を摩挲し睫げども収め難し 碧空海に連なり雲を塞ぎて盡き 緑野天に  
接して春色稠し 寒影盃に浮かぶ千嶂の雪 晚晴画に入る一川の流れ  
酔い來りて并せ採る能州の景 吟じて雄風に向えば越侯を憶う 北遊の  
次 越の見附に鎮りて 一日諸子と同じく愛宕山に上り眺望す 時に辛  
未の三月十三日なり 武蔵鵬齋龜田興禪龍) (『総集』 172作)

碑陰に「意訳 高丘に登ろうと思つて北の隅まで往つた 老眼をこすつ  
てもよく見えない 青空が海につづいて塞雲が盡き 緑の野が天に接し  
て春色がこまやかである 寒い影の盃に浮□□□山々の雪で夕晴れが信  
濃川で繪のように見える 酔つて來て能登の方を眺め 詩を吟じて強い  
風に吹かれながら謙信公のすぐれた風格をしのんでいる 夕雲(遠山夕  
雲)

昭和四十七年三月建之 見附市 見附市観光協会 内山文雄 加藤辰五  
郎 田井安平 金井朋中 淺香清喜」と追刻する。

12 崧嶽館 澁谷詢卿氏之家 對崧嶽其幽勝可欽羨焉 自命曰崧嶽館因書為  
顏額云 (『総集』 173作)

13 煙鬢樓 越之澁谷氏之家對守門駒嶽粟山之諸峯因書此以與之 鵬齋  
(『総集』 174作)

14 栃尾市万年山曹源寺第四世泰翁芳哲和尚の婦衣者、山谷村山谷茂助氏が  
開基となり、天正元年(一五七三)に殿堂を創立、入仏の式典を厳修した。  
天正九年(一五九二)四国より勸請した仏法守護神金比羅尊天を祀る権  
現堂があり、毎年七月十日例祭には殷賑を極めている(『新潟県寺院名鑑』  
参照)。

15 銀河漾々月暉々 樓擬星邊織女機 横玉叫雲天似水 満空霜霰不停飛  
太平醉民  
萬里清江萬里天 一村桑柘一村煙 漁翁醉恙無人喚 過午醒來雪滿船

關東狂生  
玉簫金瑟發商聲 葉葉軋枯海水清 淨掃蓬萊山下路 略邀王母話長生  
辛未春三月書於廣麗閣 東都鵬齋興禪龍

南斗闌珊北斗稀 茅君夜着紫量霞衣 朝騎白鹿趁朝去 鳳押笙歌逐後飛  
墨農逸民  
曲江春半日遲々 正是王孫惆悵時 杏花落盡不歸去 江上東風吹柳絲  
无悶居士

松間小檻接波平 月澹烟沈暑氣清 半夜水禽栖不定 緑荷風動露珠傾  
文化八年辛未季春月為蒼龍館主人 關東鵬齋龜田興書 (『総集』 178作)

16 清水雪海(一八四四〜一八四七)は四ツ屋の人で名は方重、字は景義、  
通称を喜七という。山水画をよくした(『越後人物志』参照)。  
17 暖和相成奉 先日は御入來被下 不勝感謝候 老拙事も本月中旬者御地  
へ罷越可申之處 彼是延引いたし候 一昨日三篠迄罷出候 一兩日中發  
足致し 見附迄罷越候 其之節寛々得拜顔可申上候也 今日屋山なる  
もの其御地通行故一寸申上置候 萬縷期拜顔之時候 勿々頓首 閏月念  
九 龜田文左衛門 清水龍之介様 文几下 (『総集』 177作)

18 記 高橋家に於かれましては友二郎氏、健吉氏二代に亘り神谷地域発展  
及び住民の福祉向上の為、左記の寄付の他、多大なご尽力とご貢献を戴  
きました。今般は、神谷地区創立八十五周年、神谷福寿会四十五周年の  
節目に当たり、その功績に対し感謝の意を後世に伝える為連名でこの碑  
を建立する(以下略) 平成二十一年六月吉日建之

19 聚遠亭記  
北越瀕海八百里之間 雲浦市鎮為壯觀之最焉 鳥井尚寛氏 倚山臨海而  
家焉其山之頂 駢崎雙聳而俯市鎮土人因名曰巒峯 山之半腹 有平坦之  
所 廣數十步許 登此而望之則滄溟浩渺 洪濤涵空海上無窮 天末無地  
遙指丘無以為山丹 鞅鞅高麗蝦夷之域云否溟 之中有島焉 如一拳之浮  
者 是為佐州 西南有斜走 而斗絶者是為能州佐州島之東有如一粟米在  
乎 大倉中者是為粟島雲浦之西十里有米山 東十里有彦峯 俱挿天雙秀  
臨海相映皆為瀕海之名山矣 春夏之間蟹氣涌出 為樓臺為城市為可喜可  
樂之幻境 秋冬之交 荒龍駢掛 掣雲捲濤 吐火嘘風為可駭可懼攫之變

状 一望之際 奇々怪々雙眸改觀焉 千里之遠景 四時之奇狀 盡聚于此矣 尚寬氏乃築一亭於其平垣之中央 以為游觀之處 名曰聚遠 己巳之秋 余游於北越滯留已三年矣 今茲亭成 請記于余 余嘗登此而熟知其壯觀焉 因述其勝概以為記 文化八年辛未夏四月 荏土 鵬齋龜田興撰〔總集〕180作

20 已穿千疊雲 來坐萬仞巔 風非塵寰度 積翠自一天 日沈蒼蒼屏淨 霞蒸丹崖鮮 萬籟絕餘響 一鳥無往還 夜深山逾寂 心清不為眠 只有孤輪月 照吾兩袖間 鵬齋興〔總集〕188作

21 山人諱就字仲孚姓釧氏雲泉其號也西肥嶋原之產其先世為武弁土山人幼從父游于崎嶇就華人而受學是以頗通華音長善續山水殊絕妙深究元人之趣風韻雅致出於塵表其父沒之後獨擔雲裝涉歷于山陽南海之諸州又游于京攝之間者多年矣後來于東都而僑居焉山人立性孤峻俗士不可得而親疎山人亦非一時有名之士則不交也某歲挈妻而適北越僦居于新斥國人聞其名來請其畫雖偏陋壤患嫗村氓覓之若巨寶山人嗜酒又好茶以有潔癖割烹濯漑必手親為之游歷所到筆墨顏料外必齋酒器茶具而行其作畫之間及意盡則投筆而立或自溫酒而成醉或自煎茶而試品不必待其畫之成或營度經歲不肯下筆或終日坐磯而垂綸或終夜圍碁而忘寢若作畫若飲酒之時座有俗客則睨視而不接言若其言辭有不愜己意則投筆拋盃而直去其不欲矯情徇俗者如此是以雖厚精索畫或不能不獲之俗人因目山人為頑傲而疾之者亦有焉其畫之品格高奇蕭灑脫俗一時無等倫者蓋在乎此歟余游于北越者凡三年其間相會相別者數矣每會大喜每別大悲余東歸日遠出送余及其分手泣涕號哭令傍人歎欷也其喜悲感慨出於真率者皆如此其年秋山人適于出雲崎淨法寺之山人在于越舉一男子名曰越兒其明年正月訃至何料別後頓歸于道山而永隔幽明也顧視往事則胡蝶為夢黃梁斷炊三十年如一日嗚呼痛哉東都故舊知山人者皆追惜之非獨賞其畫之高尚而已深愛其人之崛奇也庭瀨藩大夫海君玉浪華暨士濱田希庵二人於山人情交最密故生前嘗託死後事云其門人備後檀謙藏越後行田仲蕭欲立石以表其墓乃請銘于海君玉君玉以余素諳山人轉命銘于余銘曰性崛奇兮氣瀟灑情出真兮言無假續畫事兮是以雅 文化十一年秋九月 友人 東都 龜田興撰并書〔總集〕476作・『善身堂遺稿』所收

〔碑陰〕

畫博雲泉有巧於南宗也大矣 晚年游越客死于出雲崎 其友龜田鵬齋所撰并書之碑文未刻 我又玄社者以文人畫復興之任起也 聞是事深惜之乃影寫刊石以贈出雲崎町令建之 斯道先賢之蹟庶幾乎其不朽 大正十年六月 東京 又玄畫社同人

22 船丘神祠碑

會津小川庄福取里有稻荷神祠禍福有驗土人祈賽焉相傳云北越小千谷郷長佐藤某所奉祀也寬政辛亥歲今郷長佐藤為親適會津道出于福取里聞土人之言大驚乃就里正叩其事蹟焉年歷緣故俱不詳世系年譜雖不載其事以吾祖先所奉祀謁其祠九拜感泣而去歸郷之後擇地立祠迎其神遷而奉祀于此又遣人于京師請贈爵奉徽號曰福取神蓋取祖先所奉祀之地名也實享和元年辛酉四月八日也建祠之所曰船邱其山頗高登此而望之則邱山環繞蒼翠欲滴八海駒嶽金城諏門諸峰戴雪而聳于雲間信川橫流晴光如練碧潭燒霞白浪涵天風雨雪月之音皆入画圖可謂靈境矣嗚呼為親遠繼祖先之志擇此地而奉祀之則神之懿非獨眷佑其子孫靈威之赫變沓為和易凶為吉則一郷之民亦獲福無量矣 文化八年辛未夏四月 關東 龜田興撰〔善身堂遺稿』所收

（會津小川の庄、福取の里は稻荷神祠有り。禍福、驗有り。土人祈賽す。祖伝に云う、北越小千谷の郷長佐藤某の奉祀する所なり。寛政辛亥（一七九一）の歳、今の郷長、佐藤為親、適、ま会津道、福取の里に出で、土人の言を聞きて大いに驚き、乃ち里正について其の事蹟を叩く。年歴、縁故俱に詳かならず。世系、年譜は其の事を載せずと雖も、吾祖先を以て奉祀する所の其の祠に謁し、九拜感泣して去る。帰郷の後、地を択び祠を立て、其の神遷を迎え、而らば此に祀を奉る。又、人を京師に遣し贈爵を請い、微号を奉り、福取神と曰う。蓋し祖先の奉祠する所の地名を取るなり。実に享和元年（一八〇一）辛酉四月八日なり。建祠の所を船邱と曰い、其の山は頗る高く、此に登りて之を望めば、則ち邱山環繞し、蒼翠滴らんと欲す。八海、駒嶽、金城、諏門の諸峰は雪を載きて雲間に聳え、信川は横流して晴光、練の如し。碧潭は霞に焼け、白浪は天を涵す。風雨雪月の奇、皆画図に入る。靈境と謂う可し。嗚呼、為親は遠く祖先の心を継ぎ、此の地を択びて之を奉祀す。則ち神徳の懿

は、独り其の子孫の祐を眷るのみならず、靈威の赫は、滌いを変じて和となし、凶を易えて吉となす。則ち一郷の民、亦た福を獲ること無量なり。文化八年辛未夏四月関東亀田興撰

〔碑陰〕

先祖考為親君嘗建稻荷祠于舟岡蓋繼祖先之志也又恐歲興物換香火不繼終埋晦不可問焉乃就鵬齋先生之撰文勒之于石永表其所焉文已成未及上石盪焉捐館先考正親君欲繼其志亦不幸早歿得不肖夙受其業常傷二世有志不終焉今茲天保癸卯詢之廣瀬関矢直郷及野澤子政募工鑄之石庶幾追求先世之遺意云 天保十四年歲次癸卯秋八月 佐藤得謹識 足利大竹培書

〔先祖考、為親君、嘗て稻荷神祠を舟岡に建つ。蓋し祖先の志を継ぐものなり。また歳興り物換わりて香火継がず、終に埋晦して問うべからざるを恐れ、乃ち鵬齋先生の撰文に就きて之を石に勒し、永くその所に表わさんとす。文すでに成るも、未だ石に上すに及ばず、盪焉として館を捐つ。先考正親君、その志を継がんと欲するも、亦た不幸にして早く歿せり。得、不肖なれども夙にその業を受け、常に二世も志あれども終わらざりしを傷めり。今ここに天保癸卯、これを広瀬の関矢直郷及び野沢子政に詢り、工を募りて之を石に鑄めり。先世の遺志を追求するに庶幾からんと云う。天保十四年（一八四三）歳は癸卯に次の秋八月、佐藤得、謹んで識す。足利、大竹培書す。〕

〔建碑までの経緯〕

小千谷の人・佐藤為親とは代々小千谷本町中小路で酢醬油業を営み、庄屋を任された。この為親が会津領福取の里から地元小千谷に稻荷社を遷したいきさつが碑陽本文に綴られている。稻荷社神遷の儀は、享和元年（一八〇一）のこと。

偶然にも為親は遠く離れた福取の地に、祖先の建てた稻荷社を発見、このような祖先の事績を書き留めることに執念を抱き、偶々小千谷にやって来た亀田鵬齋に撰文を依頼し、建碑して不朽にしようとしたのだ。鵬齋は、撰文も書字も行った。当時そう長く鵬齋は小千谷に滞在していない。碑陽末尾には撰書の年月、「文化八年四月」を明記しており、これによれば佐藤為親からの依頼に応じ、直ちに小千谷を離れる前に書き

上げたものと推察される。為親の稻荷社神遷より十年後のことである。ところが碑陰によると、為親は不幸にも急逝してしまい、建碑は成されず仕舞となった。次代の佐藤正親は建碑の志を継いだものの、「また不幸にも早歿せり」と碑陰に記すところである。

そこで正親の子・佐藤得は、広瀬（広神村）の関矢氏と地元・野沢氏と協力してようやく三代目にして悲願ともなった建碑を達成したのであった。時に天保十四年八月、鵬齋撰書から三十二年経てのことである。

建碑から一七八年後の今日、佐藤家は土地を去つたが、船丘公園に登る石道中腹には、稻荷社と「船丘神祠碑」とが現存する。

### 23 越山之石

不琢不磨 文成流泉 理成廻波 鬼耶神耶 吾見其巧 非鬼非神 自然天造 鵬齋興銘（越山の石 琢らず磨かず 文は流泉となり 理は廻波となる 鬼なるや 神なるや 吾れ其の巧を見るに 鬼にあらず 神にあらず 自然の天造なり）〔総集〕487作

### 24 大井平瀑布記

越之大井平村在妻在（有）山中 其村長曰保板子潤 都下文人騷客游於越者 皆以子潤為北道主人 余北遊之次亦訪之 村落僅數十家瀨千曲川而居焉 其家疊複連接亘於信襄之地 其深遂不可窮極矣 村之南有瀑布從絶頂 而下遠望之則如懸白練欲至其下 而觀之廻蹶丘傍澗而行者數百步途窮而不能進 余前進而披叢薄攀巖而行 遂出于瀑布之右 山之半腹以樹木蒙鬱翳味而覆之 不能窺其全體矣 於是攘袂以攀枝捫蘿褰裳以躡石涉水體疲氣喘流汗霑踵 猶勵力抖神進而不止 遂越絶壑而出其左即藉棘 踞石而視之則正面相對而全體盡露矣 其山西南長走 頂平而碧天如截 瀑布縱其巔而直下 實如挾高如布 細者如縷 奔突如揉絮 噴薄如吐玉 或如白龍之倒掛 或如銀車之直迸 飛流互迫 深潭相激 其響如千磴之礪 其聲如迅雷之墜 清泉洗塵面 涼氣滌煩熱 頓覺心骨之爽快矣 終坐而觀之者既數刻 身冷神清而衣袂盡沾少焉 夕陽西沉 傍人促歸 於是賦一絶 題石而去 遂為之記以贈主人云 文化八年 昭陽協洽之 夏五月二十二日書 荏土 鵬齋興

翻字は『新潟・文人去來―江戸時代の絵画をたのしむ』（新潟市歴史博物館 H19刊）所収「大井平瀑布記」（卷子本）によった。

(意訳)

越後の大井平村は妻つま在まの山中にあり、その村長を保坂子潤という。都下の文人騷客ぶんしんそうかくは、越後に遊ぶ者であれば、皆子潤を北の主人と見なす。余は北遊の時に、またここを訪ねる。村落は僅かな数十家で、千曲川に臨み住む。家々は連なり連接して信濃の地に亘る。その奥深さは果てしない。村の南に瀑布あり、絶頂より流れ落ちる。それを遠望すると白練が上から下まで懸かるように見える。廻すなわち丘を越え澗に沿って歩く者は、数百歩で道が極まって進められない。私は、前に進むよう叢薄を掴みながら巉岩がんに登り、遂に瀑布の右側に出る。山の中腹は木茂むらしに覆われ、その全貌を見渡せない。ゆえに、袂をたくし上げ枝を攀よじ羅を捫む。裳もをからげて石を躡ふみ水を渉る。体も疲れ、息も切れ、汗も流れ、踵も濡れる。それでも力いっぱいふんばり、気を奮い立たせて止まらず進んだので、遂に絶壑ぜつがを越え右側から出る。乱れ茂っている草木を踏み石に躡うづまりて見渡すと、両面が相対し山全体が現れる。その山は西南に長く走り、頂は平たくて青空を切る如く。瀑布はその巔いただきからまっすぐに流れ落ちて、高い所は、まことに布の如く、細いものは糸の如く、飛び回る水しぶきは絮わたが揉まれるのごとく、勢いよく噴き出すのは玉を吐く如く、或いは白龍が逆さまにぶら下がる如く、或いは銀車がほとぼしる如く。激流は互いに追いかけて、深潭は互いに突き当たる。その響きは千壑せんががぶつかる如く、音は迅雷じんらいが落ちるようだ。清泉に汚れた顔を洗い、涼氣せんきに煩熱はんねつを滌すすぎ、頓とみに心は爽やかになる。終にここに座って景色を見始めて既に数刻が経つ。体が冷さめ頭はすっきりとなり、そして濡れた袖もほとんど乾いた。夕陽は西に沈み、傍らの人に帰りを促がされる。ここにおいて一絶を賦し、石に題して去る。そしてこの記を作り、主人に贈る。

## 25

其後は御疎濶申上候 如諭御清福被成御座奉察致候 随而老拙無異に遊行上仕候 乍憚御省慮可被下候 去年は参上仕而寛々得拝顔 殊にお世話に罷成御厚情之段 千万不勝感謝候 春と成候而又々御地へ可罷越心懸候処江戸表より急に帰郷之積りに御座候 尚又帰府之上御礼可申上候 乍憚御家内様皆々御出合申候人方へよろしく御致声奉願上候 道中故□

□□□ 忽々海涵所祈候 不宣 五月廿二日 鵬齋 興 頓首  
森田甫三様 座下

副 早春中沢半右衛門殿御尋問被下忝奉候、是亦御序に宜敷願上候也  
〔加茂郷土誌〕第二十六号所収)